
IS 新しい人生

zero

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 新しい人生

【Nコード】

N2861Z

【作者名】

zero

【あらすじ】

神様のミスで死んでしまった青年がチートなISと不思議な力を持ってISの世界に転生するおはなしです。キャラ崩壊や原作崩壊もあるかもしれませんがそこらへんのところはよろしく願います。読んでくれると嬉しいです

プロローグ(前書き)

どうぞどうぞかよろしくお願ひします

プロローグ

「あれここはどこだ？」

真っ白な空間に俺はいた

【やあ、目覚めたかい？ここは神界と呼ばれるところじゃよ】

突然目の前に白いローブをきた老人が現れた

神界なにいつているんだこいつは？頭がいかれているのか？

【いかれてなどおらんぞ】

んっ！なんでこいつ俺の考えていることがわかるんだ！？

【ほっほ、それはわしが神だからじゃ】

「本当に神様なのか？あと俺はなぜここにいる？」

【わしは本当に神だ、お前さんがここにるのは死んだからじゃ】

なに俺は死んだのか？まあいいかでも俺はなぜ死んだんだ？

【それはこっちのミスでな本来お前さんは死ぬはずじゃなかったんだ・・・そこでお前さんには転生してもらう、この中から選ぶが良い】

そこには 遊戯王、IS、とある魔術の禁書目録、ガンダムsee
destiny、モンスターハンターだった

「うーん、んじゃISの世界でお願いします」

【了解した、なにか欲しい能力とかはあるか？】

「ならまず専用機が欲しい」

【どんなのが欲しい？】

「機動性重視で概観はストライクノワールで背中にはランスロット・アルビオンのエナジーウイングで武器はバスターの高エネルギーライフルとガンランチャーで高エネルギーライフルは無反動で弾は自分の思った弾がでるようにして、ガンランチャーは威力を高めて近距離を主体にして無反動であとはストライクノワールのビームライフルとビームブレイドをお願いします」

【わかった、他に欲しいものはあるか？】

「前の世界でもってたあの力をもっていくことはできるか？」

【ああ、できるぞ、でもあの力はあまりよくないな】

「わかっているできる限りつかわないよ」

【わかった、他にはもうないかい？なければすぐ転生させるぞ】

「ああ、もうないありがとう神様」

【ほっほいいってことよこちらが悪いのじゃからな、ではいくぞ】

神様はなんか呪文をと覚えてるようだ、だんだんと俺の身体が光につつまれていく

【これで終わりだ】

「ああいろいろありがとな」

光が俺を包み込み意識がおのえていく

【では神器、良い人生を】

そして完全に意識を失った……

プロローグ（後書き）

よんでくれてありがとうございます。

感想等ありましたらどんどんかいてください。

設定（前書き）

主人公の今のところの設定です

設定

名前 天空神器

身長 176cm

体重 55kg

性格 普段はやさしいがキレると口調がかわる 面倒見があまりないなど

容姿 細マッチョで整った顔だちで髪は肩までのびており縛っている 髪の色は黒 肌は白

好きなもの パスタ、戦い、面白い人

嫌いなもの 生のトマト ブロッコリー うるさい人たち しつこい人

専用機

LEE

機動性重視で色は黒、概観はストライクノワールで背中にはランスロット・アルビオンのエナジーウイングを搭載、エナジーウイングは最高速度で瞬間加速を上回る速度^{イグニッションブースト}

武器

バスターガンダムの高エネルギーライフルとガンランチャー、ストライクノワールのビームライフルとビームブレイド、エナジーウィングのハリミみたいな攻撃を使用

高エネルギーライフルは無反動で自分の思った弾がでる使用で一撃必殺以上のものはガンランチャーと合体しないと使えない

ガンランチャーも無反動でこちらは近距離をメインにして威力が高めでスモーク弾やスタン弾などの特殊な種類の弾がうてて、高エネルギーライフルと合体することで中・遠距離の散弾を高威力で照射する

設定（後書き）

チートな機体です。これから性格や機体設定が変わることもあるかもしれませんがどうかよろしくおねがいします

第1話（前書き）

本編開始です

高エネルギーライフルをライフルと呼び

ガンランチャーはそのまま

ビームライフルはストライクノワールのやつが二丁で呼び方はシュー
ーティーと呼ぶ

ビームブレードはそのままで二つ装備です

第1話

んっんここはどこだ、俺は今どこかの部屋のベッドにいるようだ。

「ISの世界にきたんだっけな、とゆうことはISもどこかにあるはず」

俺は自分の身体を探して左の中指に違和感がありみてみるとそこには黒の指輪がはめられていた

「これが俺のISか、どこかにISを起動できることはないかな」

俺が思っていたら頭の中にこちらへん一体の知識が入ってきた、これは便利だつとここでいいかな。俺は近くの裏山まで移動した。

裏山

「いくぞ【LIE】」

すぐに薄い黒の粒子が俺を包みこみISをまとっていた。右手にはライフル、左手にはガンランチャーを装備していた。俺はフォーマットと最適化、一次移行ファースト・シフトが終わるまで武器を色々出し入れして早くだせるようにしている。

「よしためしにガンランチャーの弾をゴム弾にして撃ってみるか」

ガンランチャーを抱えてゴム弾を木に向かって撃つ

《バキバキバキバキバキ》ものすごい音をたて木がなぎ倒されていく

「やっぱ、やばいやばいやばいこれはシャレにならないほど折れた
どうしようどうしようどうしょ

ゴム弾は木を貫通して後ろの木にも貫通しまた貫通するのが8回つ
つき合計9本の木が折れた

『フォーマット及び最適化が終了しました。 確認をお願いします』
そう表示され確認を押す

『一次移行確認しました、「ピピッピピッ」前方からISS二機こちら
らに向かってきています。』

「機体の詳細を教えてください」

『一機は日本産の打鉄、もう一機はフランスのラファール・リヴァ
イブです』

「わかった」

「そのISS止まれ動くなそこでなにをしている」

そういつて打鉄をまとった女性が降りてきた、それに続きリヴァイ
ブをまとった女性も銃を向けながら降りてきた

「あなた達は誰ですか？」

「私はIS学園で教師をしている織斑千冬だ」

「同じく山田麻耶です」

「そうですか、俺は天空神器です」

「そうか、天空お前はここで何をしている、なぜ男のお前がISを動かすことができる、それはだれにもらった」

「俺ここで今日もらったISをここで動かしてただけだ、もらった人はわからい・・・寝てる時に指にはめてあったただけだ、なぜ起動できるのかは俺にもわからない」

「そうか・・・でお前は今からどうするんだ」

「どうしましょうね」

「いくあてがないならIS学園に入ることをオススメしますよ」

笑顔で山田先生がいつてくるが横の鬼が断ったら殺すと顔に書いてあるので入ることにした

「わかりました。入学式はいつですか？なにか必要なもの等あるならこの住所に送ってください」

「ほう、私はてっきり断ると思っていたが入るのか。まあいい入学式は三日後だ必要なものはあとで送る、うちの弟も一緒に入学するから仲良くしたってくれ」

「わかりました。あとその折れた木の後処理をお願いします、そ

れではさようなら」

俺は木の後処理をまかせ自分の【力】で自分の家まで瞬間に移動した、移動する前に織斑先生が待てと叫んでいるが無視した。

はああ転生初日から原作キャラに会うとはでもISS学園の入学式が三日後だとゆうとあの電話帳より太い参考書を覚えなといけなのはめんどくさいな・・・

まあいいや今日はもう寝よう

こうして転生初日が終わった

第1話（後書き）

感想やアドバイス等ありましたらどんどん書いてください

第2話（前書き）

だいぶ原作よりですが、みてくれると嬉しいです。

第2話

「全員揃ってますねー。それじゃあSHRはじめますよ!」

黒板の前でにこつりと微笑む山田先生は子供が無理して大人の服を着ました的な不自然な格好でいつているがみんな無視して俺と織斑一夏の方を見ている。

「そ、それでは自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順でえっと天空くんから」

涙目で自己紹介をお願いしてくるのですぐに自己紹介した

「え〜と天空神器あまのくらしんぎです。趣味は料理で好きな食べ物はパスタ系で、嫌いなものはトマトです。え〜と一年間よろしくお願いします」

「きゃあああああー!」

ソニックブームが起こり耳が滅茶苦茶痛い

「男子!男子しかもうちのクラス!」

「白馬が似合いそうな王子様!」

「守ってほしい!」

「み、みなさん静かにしてください、まだ自己紹介は終わってません、つ、次の人お願いします」

たんたんとして自己紹介が終わり織斑一夏の番になった

「織斑一夏くんっ」

「はっはい!？」

いきなり大声をだして裏声になりまわりからくすくすとわらい声が聞こえる。俺も笑いをこらえている

「あつ、あの、お、大声出しっちゃてごめんなさい。お、怒ってる？怒ってるかな？ゴメンね、ゴメンね！でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まって今『お』の織斑くんなんだよね。だからね、ご、ゴメンね？自己紹介してくれるかなあ？ダメかなあ？」

見てみると山田先生が織斑にペコペコと頭を下げていた。

「いや、そんなに謝らなくても……っていつか自己紹介しますから、先生落ち着いてください」

「本当？本当ですか？本当ですね？や、約束ですよ。絶対ですよ！」

満面の笑みで顔を上げて織斑の手を取って熱心に詰め寄る。ってか近すぎだろ！

「えー……えっと、織斑一夏。よろしくお願いします」

みんなめちゃくちゃ織斑を見て「もっと色々しゃべってよ」「とか」「それで終わりじゃないよね？」とかの視線に刺されている

「……………」

「えーと」

視線がさらにつきさす

息を吸い込み

「以上です」

がたたつ。ほとんどの女子がずっとこけていた。俺？俺こけなかったぜ、だって原作しているもん

バタンツ！すごい音がして頭を叩かれている

「げえっ、関羽!？」

パンツッ！また叩かれている、すげえ痛そうだ

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

タイミングをみはからったのかどうかはわからないが山田先生が話しかけている

「あ、織斑先生。もう会議は終われたんですか？」

「ああ、山田君。クラスの挨拶を押し付けてすまなかった」

「い、いえっ。副担任ですから、これくらいはしないと」

さっきの涙声から復活していた山田先生ははにかんでいた。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、理解しろ出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五才を十六歳までに鍛えぬくことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いな」

ものすごい暴力発言をはいたにもかかわらず

「キヤーーーーー！千冬様、本物よー！
ーーーー！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から！」

いや北九州とか近いでしょ、ここには外国の人もきてるんだから

「千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

めちやくちゃ叫んでるよくみると半分ぐらいの女子は叫んでる

「はああー毎年よくもこれだけの馬鹿者があつまるものだな。それとも何か？私のクラスだけに集中させているのか？」

織斑先生はうっとうしがっているようだ

「きゃあああああっ！お姉様！もっと叱って！罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躑をして〜！」

はつきりいつてめちやくちやくるさい。いやまじでうるさいんだよ鼓膜やぶれるぐらいにうるさいんだよ！

「で？挨拶も満足にできんのか、お前は」

「いや、千冬姉、俺は〜」

パンツ！うわ、またたかれていたそうだな、織斑先生はしっているのかな、頭を叩くと脳細胞が五千個死ぬらしいということ

「織斑先生と呼べ」

「はい、織斑先生」

このやりとりであるの二人が兄弟とゆうことがばれてチラホラきこえる

「さあSHRは終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作も半月で体に染みこませる。いいか、いいなら返事をしろよくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

ものすごい鬼教官である。まだ悪魔のほうがやさしいと思う、おつとこつちを睨んできた目をそらした

「席に着け織斑、一時間目を始める」

第2話（後書き）

感想やアドバイスがあったらどんどん書いてください！

第3話（前書き）

主人公は大体原作を知っていますが、寝起きは忘れることが多いです

第3話

一時間目の休み時間

一夏side

この視線の雨はきつすぎる・・・もう一人の俺と一緒にやつがいたな・・・確か天空神器だったけ？話しかけてみるか

「天空だったけ、おれは織斑一夏って言うんだ、よろしく」

「ああよろしく。神器でいいぜ」

「なら、おれも一夏でいいぞ」

「わかった、一夏この空間きつくないか？」

確かにこの空間はきつい、視線に形があったら俺たちは穴だらけだ

「確におれもきつい。お前がいてくれてよかった」

「俺もだてゆ「ちょっといいか？」ん？一夏にか？」

あつ！筭だなんかようかな？

「ああ、一夏を借りる」

「ん？なんだ筭」

「話があるついてこい」

六年ぶりか〜つもる話でもあるんだろ

「ああ、いいぞ廊下でいいか」

「ああそれでは行こう」

side out

神器 side

一夏たちいつちゃったから寝るかお休みい……

「織……入……の……書を……だか？」

んっん、なんだ？

「古……電話……間違……捨てました」

パンツ

ん？まさか俺は授業始まって寝てたのか、まあいいかバレテないし

「必読と書いてあっただろうが馬鹿者、あとで再発行してやるから一週間以内に覚える。いいな」

よしばれてない……

「いや一週間ではっん！千冬姉、神器が起きてる！」

一夏のばかヤロー織斑先生こっちきたやがった

パンツ

「織斑先生だ馬鹿者」

「はい、織斑先生」

「では天空、居眠りの罰としてISとはなにか答える」

「わかりました。ではISとは……………
……………

省略

……………
……………です」

おおおおっ、まわりから歓声が聞こえる

「すごいですね天空くん、私なんてその半分も理解してないです」

それでいいのか山田先生……………

「ここまでとはいわんがこれの半分ぐらいは理解しろ、ちよっどい

い時間だこれで二時間を終了する。号令！」

時計を見ると二時間目終了時刻だった

休み時間

「すごいね！天空くんよくあんなにも覚えれたね！」

そんなにすごいのか？ 主人公は記憶力はめちゃくちゃいいです

「なんかコツでもあるの？」

「いや、ただ読んだだけだよ、普通それだけで覚えられるよ」

「いや、普通覚えられないから」

「」「」「うん、うん」「」「」

一夏が言ったら、集まっている人が全員うなずく

「そうか？」

「普通そうだ」

「でも「ちょっと、よろしくて」ん？君はだれだい？一夏知ってる娘？」

「いや、知らない。」

本当は知っているが知らないフリをする

「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリス代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」

ああ、耳元でうるさい

「質問いいか？」

「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

今の時代に貴族なんていたのか。覚えておこう

「代表候補生ってなんだ？」

周りで聞き耳を立てていたクラスの女子たちがずっこけた。

「あ、あ、あ、あなた本気でおっしゃってますの！？」

「おう。知らん」

すごいバカだ

「信じられない。信じられませんわ。極東の島国というのは、ここまで未開の地なのかしら。常識ですわよ、常識。テレビがないのかしら……」

テレビあるに決まってるだろ

「で、代表候補生って？」

「一夏、代表候補生って言うのは国家代表IS操縦者の候補生たちだ。簡単に言えばエリートってとこだ」

「そう！エリートなのですわ！」

ほんとにうるさい、こら人に指をさすな

「本来ならばわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡……幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

もういいや寝よ、お休み……

「……い……斑……推……します」

やばい！また授業中に寝てたのか、ていうかなんでみんな起こさないんだ？

「はい！私は天空くんを推薦します」

ん？今なんで俺の名前がでたんだ。なんの推薦だ？

「では候補者は織斑と天空のどちらかでいいか？」

だからなんの候補者だ！

「待つてください！納得がいきませんわ！」

俺が納得しとらんわボケ。なんの候補者だ！

「そのような選出認められません！大体、男がクラス代表なんていい恥さらしですわ！わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

そうかクラス代表か、やりたくないなー一夏におしつけるか。よしそうしよう

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！わたくしはこのような島国までIS技術の修練に来ているのであって、サーカスをしにきたのではないですわ！」

それなら俺たちが猿なら地球上の人間全員猿だし

「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

「大体、文化としても後進的な国でくらさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で」

カチン 俺がキレた音

カチン 一夏がキレた音

いわせておけばキャンキャンと

「イギリスだって大してお国に自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「文化としても後進的？ならISはどこ誰がつつくだんだ？イギリスなのか？違うだろ日本の一人の女性を作ったんだぞ。なら君の大好きなイギリスはISを作れるのか？作れないだろ。さてどっちが後進的な国ですか？」

「なっ！？あなたたちわたくしの祖国を侮辱しますの！？」

「決闘ですわ！」

パンツと机を叩いて言って来た。机がかわいそうだ

「おう。いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」

「言うておきますけど、わざと負けたらわたくしの小間使いいえ、奴隷にしますわよ」

ほうこいつにそういう趣味があるのか覚えておこう

「真剣勝負で手抜くほど腐っちゃいない」

「なら一夏負けたたら俺になんか奢れ」

「なんでだよ」

「いやなんとなくだ、そのかわり俺が負けたらお前のほしい物を買ってやる」

「わかった、その話のろう」

うんうんわかってるねえ一夏でも俺絶対に負けないから

「ほう、教師の前で賭け事か」

「織斑先生もどうです？一夏か俺が負けたら、俺が自腹で何でも欲しい物を買ったり用意しますよ」

「今回だけは見のがしてやる」

やった買収成功

「っでハンデはどのくらいつける？」

「あら、さっそくお願いかしら？」

「いやおれたちがどのくらいハンデつけるたらいいかなーと」

一夏がいったらクラス中から爆笑が巻き起こった

「織斑くん、それ本気で言ってるの？」

「男が女より強かったのって、大昔の話だよ？」

「織斑くんは確かにISに使えるかもしれないけど、それは言い過ぎだよ」

すごいみんな笑ってる、そんなに笑えるのか？

「……じゃあ、ハンデはいい」

「ええ、そうでしょう。むしろ、わたくしがハンデを付けなくてい

いのか迷うくらいですわ。ふふっ、日本の男子はジョークセンスがあるのね」

べつに全員がジョークセンスあるわけじゃないけどな

「ねー、織斑くん。今からでも遅くないよ？セシリアに言って、ハ
ンデ付けてもらったら？」

近くの子が一夏に言ってるやさしいなあ

「男が一度いったことを覆せるか。ハンデはなくていい、だろ神器」

「まあ、そうしとくか」

「えー？それは舐めすぎだよ。それとも、知らないの？代表候補生
の力を」

まあ確かに代表候補生は強いのだろう、だがおれに勝てるやつなん
ていない・・・

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜の放課
後に行く。織斑、オルコット、天空はそれぞれ用意しとくように。
それでは、授業を始める」

ああ、すくめんどくさいもついいや寝ようそれがいい、お休み・・・

「寝るな！天空」

バゴンッ 行ってあれやばい意識が・・・

第3話（後書き）

読んでくださってありがとうございます

感想等かいてくれたらうれしいです

第4話（前書き）

キャラが安定しない・・・

第4話

気がついたら朝だった・・・ここどこ？なんか頭が痛い・・・ああ！そうか織斑先生に出席簿アタック改をやられたんだ。あれは痛かったなあ。音が違うもん。さて今からどうしようと考えたら部屋にだれか入ってきた。

「やっと目覚めたか。昨日はすまなかった、まさか気絶するとは思わなかった」

俺、昨日の三時間目からずっと気絶していたんかあすごいな俺

「いいですよ織斑先生、そんなに謝らなくても」

「そうか」

「でもそのかわり俺が授業中寝るのを許してください」

俺はたくさん寝ないと疲れてしまうからしょうがない

「それはダメだ、学生なのだから授業を受けるのは義務なのだ」

「ですよーでもこっちだって疲れを取るために睡眠をとらなきゃいけないんだ！

「そうですか織斑先生、では俺がオルコットに勝ったらそれを許してください」

「いいだろ。私だけ賭ける物がなかったからちよーどいいだろ」

「ありがとうございます、それと織斑先生、今何時ですか？」

今の時間を知らない朝ご飯も食べれなくなってしまふ。

「ん？今か？8時だ」

はい？いまなんと？

「えっ？もう一度言ってくれますか」

「8時だ」

「朝飯の時間があああああああ」

ちくしょー俺のバカなんでもうちよつと早くおきないんだ折角の朝ご飯が食べれなくなるだろ！

「そう急ぐな、今日だけは私が悪かったから、遅刻を見逃してやる」

ふうーよかった。んじゃゆっくり朝飯食べるラッキー

「では食堂に向かうか、そういえば織斑先生はもう朝ごはん食べたんですか？」

「ん？私はまだ食べてないぞ」

「なら、先生もどうですか一緒に朝ごはん、一人で食べるより二人で食べたほうがおいしいですよ」

「はあ、わかった、いくぞ」

「はあ〜い」

「はあー食った食った」

俺はそういいながら腹をぽんぽん叩きながら、織斑先生と教室に向かっている

時間はもちろん遅刻の時間だが今日はSHRをなしにしたそうで少し余裕がある

「はあー天空お前どんだけ食べるんだ、見ているとこっちが食欲をなくす」

そっぴいなながらも織斑先生も和食セットを食べていた

「俺は食べたからお腹一杯になるまでたべますから。逆に食べないときはとことん食べませんよ」

「そうなのか？」

「そうですねよ、そういえば織斑先生」

「ん？なんだ？」

「一夏のISはどうするんですか？まさか訓練機で相手をするわけではないでしょう？」

「様原作は知っているが俺とゆうイレギュラーの存在がいるから原作道理には進まないかもしれないから、聞けることは聞いておこう」

「織斑のISは学園で用意されることになっている」

よかったここは原作道理か

「そうですね、あっ！もう教室ですね先にいかしてもらいます」

「ああ、わかった」

ガラララッ

「おはよう」

あいさつをして入るとみんなが詰め寄ってきた

「天空くん大丈夫？」

「朝まで気絶してたんだって？大丈夫？」

みんな俺のことを心配してくれてるようだ。

「ああ、もう大丈夫だ、心配してくれてありがとう」

笑顔でいったら・・・

「キヤアアアアア！私にありがとうだって！聞いた聞いた！？」

「違うわよ、あんたに言ったんじゃないわたくしに言ったのよ！」

みんなにいったのに・・・

ガラガラガラッ

「席に着け一時間目を始める、号令」

すごい織斑先生がいったら瞬間に全員座った

「起立、礼、着席」

「あーあ、織斑お前のISだが準備まで時間がかかる」

「え？」

「予備機がない。だから学園で専用機を用意する」

おっー夏の頭に？がある。あいつわかってないな。教室中はざわめいているけど

「織斑。教科書六ページを音読しろ」

「え、えーと……」現在、幅広く……

長いので省略

ます』……」
……
……禁止されてい

「つまり、そういうことだ。本来なら、IS専用機は国家あるいは企業に所属する人間しか与えられない。が、お前の場合は状況が状況なので、データ収集を目的として専用機が用意されることになった。理解できたか？」

「な、なんとなくは……でも神器はどうなるんですか？」

「あいつはもう専用機を持ってる」

「本当か！？神器！」

「ああ、ほれ」

そうやって俺は一夏に左手の中指にはめている黒い指輪を見せる

「うああ綺麗な指輪天空くんにすごくにあってる」

だれかがそういつている。そうかな？

「そうかもう神器はもっているのか」

こら一夏そんな悔しそうな顔するなお前ももらえるんだから

「あの、先生。篠ノ乃さんって、もしかして篠ノ乃博士の関係者な
んですか？」

おっ何人かは気づいているな

「そうだ。篠ノ乃はあいつの妹だ」

まあいつかバレるんだからいったんだろ

「ええええーっ！すごい！このクラス有名人の身内が二人もいる！」

「ねえねえっ、篠ノ乃博士ってどんな人！？やっぱり天才なの！？」

「篠ノ乃さんも天才だったりする！？今度ISの操縦教えてよっ！」

別に姉が天才だからって妹が天才ってわけでもないのに、まあ天才
かもしれないけど

「あの人は関係ない！」

うお！びっくりした

「……大声だしてすまない。だが、私はあの人じゃない。教えられるようなことは何も無い」

そいつって窓の外に顔を向けた

「さて授業を始める」

よくこのタイミングで授業をはじめられるな、このあとちゃんと授業を受けた……本当だよ！別に寝て出席簿アタックなんてされてないからな！

一時間目の放課後

オルコットが話かけてきた

「安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようと思っていたいなかったでしょうけど、まあ？一応勝負は見えていますけど？さすがにわたくしがフェアではありませんものね」

「え？なんで？」

一夏ちゃんと勉強しろ

「あら、ご存知ないんですのね、いいですわ、庶民のあなたがたに教えて差し上げましょう。このわたくし、セシリア・オルコットはイギリスの代表候補生……つまり、現時点で専用機を持っていますの」

「へーそれはすごいな」

「夏それバカにしているようにしか聞こえないぞ

「……馬鹿にしていますの?」

ほらみる

「こほん。さつき授業でも言っていたでしょう。世界でISは467機。つまり、その中でも専用機を持つものは全人類六十億超の中でもエリート中のエリートですわ」

人類って六十億超えていたのかあ

「そうなのか……」

「そうですわ」

「人類って今六十億超えていたのか……」

「そこなのですか!?!」

「ババン! あっ一夏の教科書落ちた一夏かわいそう、てか一夏俺と同じこと考えていた」

「あなた! ほんて「キーンコーンカーンコーン」っ! またあとできますわ!」

もうこなくていい、もういいや次織斑先生の授業じゃないから寝ようお休み……

第4話（後書き）

感想があったら書いてくれると嬉しいです！

第5話

「・・・神・・・きる」

うるさいなー寝かせてくれよ

「起きろ神器！」

「うるさああああああああああい」

「グハッ！」

と、言いながら目の前にいたやつにアッパーをかました

「ん？何だー夏かどうした？痛そうに顎おさえて」

「神器のアッパーをくらったんだよ！」

「そうかそうかそれは悪かった、これからは気おつけとくは」

「まあいいやそれより昼飯食いに行こうぜ」

「ああ、いいぞ」

「わたしはさきについている」

そういつて篠ノ乃さんはさきについてしまった

「んじゃおれ達もいくか」

「ああ」

「はあー食った食ったここの学食めちゃくちゃおいしいからついついたのんじまうんだよな」

「はあー神器お前どんだけ食うんだよみてるこっちが食欲なくすは……」

織斑先生と同じことってやがる、しかも昼飯はちゃんと食ったくせに

「一夏お前、織斑先生と同じことっているぞ」

「え？そうなのか。姉弟だからか？」

「まあ、そうだな」

「そうか、そういえば一緒に剣道場で箒とおれで練習しないか？」

そういうと一夏の隣で歩いていた篠ノ乃さんがさらにムスツとした

「いや俺はいい、この視線の雨で疲れているから部屋帰って寝る予定だから」

視線の雨で疲れているのは嘘だ本当はただ寝たいだけだ

「まあおれもあの視線の雨はきつい。本当に神器がいてくれてよかったぜ。もし一人だったら今の倍もあの視線の雨を受けると思うとぞっとするぜ」

「そういうことだから俺はパスで」

喋っているうちに教室に入りまた授業が始まるまで喋っていた。

「はあーやっとな終わったー」

俺がそういうと一夏がいつてくる

「お前ただ寝てただけじゃん！しかも千冬姉の授業中！」

そうなんだよ、俺織斑先生の授業の時も寝てたんだよね、だけど織斑先生はそんなにやさしくなかった、俺が寝たことがわかった瞬間に出席簿アタックが飛んでくるんだもん、だから寝ながらも出席簿アタックを止めれるようになった

「まあそのおかげで寝てる時に出席簿アタックを喰らわなくなっただけかな」

「神器お前すげーな、今度それおしえてくれ！」

「ああいいけど俺があれを使えるようになったのは、あの出席簿ア

タック改にやられてからだぞ？一夏あの出席簿アタック改を受ける
覚悟はあるのか？」

そういうと一夏は冷や汗をかき

「悪かった、この件はなかったことに」

っといってきた

「そうだろうな、あれはめちゃくちゃいたかった・・・」

「そ、そいえば神器の部屋ってどこだ？」

「ん？俺の部屋？やべ俺しらねえや」

そういつたら後ろから山田先生が走ってきた

「天空くん、天空くん、ハアアハアアこれ部屋の鍵です」

そういつて鍵を渡してくると1024か

「それではわたしはこれで」

「ありがとうございますわざわざこんなために」

「いえいえこれも仕事ですからあゝ」

そういつてまた走っていつてしまった

「神器部屋どこ？」

「ん？1024だぞただし八時以降俺の部屋にくるな、俺寝てるかもしれないから」

「八時！？お前寝るの早すぎじゃね！？」

「そうか？」

「そうだよ・・おっそろそろ剣道場行かなきゃ、箒が待ってるからな、んじゃ神器またあとで」

「あとではないぞお休みだ！」

「まだ八時にもなってるないだろ！」

と、言いながら笑いながら走ってった

「部屋いったら寝るか・・・」

その後時間は経ち一週間後のクラス代表決定選となった

「ちくしょう。おれの機体はまだこないのか！」

「織斑お前の機体は遅れるから、先に天空が先にやれ」

そういつて俺を見てくる

「了解しましたあゝ。いくぞLIE」

そういつと黒い粒子が俺を包み俺のISが展開される

「んじゃ一夏サクツと勝ってくるから賭けのことわすれるなよ？あと織斑先生も」

「わかった勝ってこい神器！」

「天空負けたらグラウンド百周を天空にやってもらおうか」

ゾクツ！！！百周はやばいだろ、てか篠ノ乃さんもなんかいつてくれるとうれしいのに・・・

「それじゃーいつてくるぜ」

そういつて戦場に出かけた

第5話（後書き）

感想等あったら書いてくれるとやる気がアップします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2861z/>

IS 新しい人生

2011年12月15日00時52分発行